



## 出張紙芝居

### 小児科（オレンジ4階病棟、外来）

小児科医師 恩田恵子

“先生、私、自分の病気を幼稚園のみんなに教えたいんだけど、どうしたらいいかなあ”

2016年秋に1型糖尿病を発症したSちゃん。

発症から4か月ほど経過した頃、外来で突然の質問に驚きました。

幼稚園の先生も園児たちにSちゃんの病気について伝えたいが方法を模索しており、毎日お弁当時にインスリン注射に向かう母も他の園児に“何しに来たの〜？”と尋ねられる日々。みんなの“どうしたら良いかな？”の気持ちが合ったかのようなタイミングでした。

本人や家族に病気の説明をするのはもちろんですが、“友達にも知ってもらいたい！”、“味方になってもらいたい！”…当たり前の事のようにですが、その発想になかなか気づかず、Sちゃんの言葉にハッとしました。

一緒に方法を考えて、幼稚園でもよく登場する“紙芝居”を作ったらどうか！という案が出ました。最近製薬会社などから子供向けの疾患パンフレットが入手できるようになりましたが、幼稚園児には内容が難しすぎ、絵も可愛くないことが多いため、“武蔵野赤十字病院 小児科”のオリジナル紙芝居を作ろう!!ということになりました。

入院中の主治医、プライマリー看護師、小児看護専門看護師、糖尿病認定看護師、病棟保育士、外来看護師の有志で会を結成し、シナリオ作りから絵も全てオリジナルで作成しました。

1型糖尿病について、詳しく幼稚園児に説明するのはとても無理なので、

- ・体の中のお砂糖の量をちょうど良くできなくなってしまう病気
- ・注射をしなればいけない病気（1日何回も！）
- ・注射を頑張れば、あとはみんなと一緒に何でもできる
- ・元気がない時は先生を呼んでほしい／補食をとる必要がある

にポイントを絞りました。

幼稚園の先生にも実際に見ていただき、言葉の言い回しや園児に理解できる内容かを確認していただきました。

当日は年長児50名に紙芝居と内容に関するクイズを行い、そのあと見本のインスリン注射器や血糖測定器に実際触れてもらいました。

どの子も真剣に話を聞いてくれて、Sちゃんの病気を少しでも理解してくれたかなと感じました。

保護者の方には特別なアナウンスをしませんでしたが、20名以上の方が駆けつけてくださいました！

後日、参加していただいた父兄の方々から

“大人が見ても分かりやすい紙芝居だった”

“他の病気の紙芝居も作ってほしい！”

“もう、お菓子をあげてはいけないと思っていた。”

“Sちゃんが病気だと分からなかった。手伝えることは何でも言ってほしい！”

等、たくさんの意見を頂きました。

子どもたちも“注射痛くないの？すごいね”と励ましてくれたり、  
Sちゃんの母を見ても“注射に来たんでしょ！”と言ってくれるようになったそうです。

病気を公表することは、メリットもデメリットもありますし、快く思わない人もいるかもしれません。でも、困ったときに力になってくれるのはいつも近くで一緒に過ごす幼稚園の先生やお友達であることも十分にあり得ます。

Sちゃんは、いつもお弁当の前にそっと教室を抜けてインスリン注射をしたり、園長室で補食を食べていましたが、みんなの前で出来るようになるきっかけになってくれればうれしいです。

今回は1型糖尿病で幼稚園児～小学校低学年を対象とした紙芝居でした。  
小児科には他にも様々な疾患を抱えながら園・学校生活を送る児がたくさんいるので  
ニーズに応じてこのような活動が行えたら良いなと思いました。

最後に、幼稚園の先生方、年長さん、ご父兄の方  
ご協力ありがとうございました。

